

文節木を用いた構造表示と解釈記録

高本 條 治*
(平成11年10月29日受理)

要 旨

文節木は、日本語の文構造を視覚的に表示するための図形的表現である。文節木は、いくつかの文節ノードとそれらをつなぐ関係リンクから成る。文節間のリンクは、隣接文節の直接結合関係を表す場合と、中間に他の文節を挟んだ保留性の関係を表す場合とがある。

文節木は、グラフィック表示形式 (G形式) とテキスト表示形式 (T形式) のどちらでも表現できる。G形式文節木 (GPT) は初学者にも書きやすく読みやすい。一方、T形式文節木 (TPT) を用いると、日本語、日本文学、国語教育などの調査研究にコンピュータを利用している者にとって、解釈記録付きテキストコーパスの蓄積と流通とが容易となる。

文節木は、各自の意味論的・語用論的な解釈に応じて新しいノードやリンクを付け加えることにより、「解釈記録形式 (IRF)」と呼ばれる表示形式へと拡張・発展させることができる。IRFによって、論理形式の選択、表意の発展、推意に関する推論といった語用論的な解釈を簡潔に示すことができる。

KEY WORDS

phrase tree (p-tree)	文節木	structural ambiguity	構造的曖昧性
interpretation recording	解釈記録	pragmatic interpretation	語用論的解釈

1 文節木による構造的な曖昧性の表示

「文節木」は、高本 (1999) において提案した日本語の文構造表示の方式で、「文節関係解析木」を略してこう称している。文節木では、文節を単位として、各文節ノード間の結合と保留の関係をリンクで表す。

例えば、名詞句は文法構造の上で曖昧であり、 $a \cdot b$ の二通りの文法関係で理解することが可能である。

(1) 有名な大学の助教授

a. ((有名な+大学の)+助教授) b. 有名な+ (大学の+助教授))

この名詞句の構造的な曖昧性は、次のようにツリーやブラケットによって表示し分けることができる。言語学ではこのような構造表示方法を採用するのが一般的である。

* 言語系教育講座

(2) ツリーによる構造表示



(3) ブラケットによる構造表示

- a. [α [β 有名な 大学の] 助教授]
- b. [α 有名な [β 大学の 助教授]]

「文節木」もまた同様に、(1)の名詞句がもつ構造的な曖昧性を表示し分けることができる。以下に示すように、文節木 (Phrase Tree or P-tree) にはグラフィック表示形式 (G 形式: Graphic format) とテキスト表示形式 (T 形式: plain Text format) とがあり、それぞれ GPT, TPT と略称している。特に後者は、プレーンテキストしか使えない環境 (通常の E メールを用いたデータ交換など) での使用を想定したものである。

(4) G 形式文節木 (GPT) による構造表示

- a. 有名な—大学の—助教授
- b. 有名な———
大学の——— 助教授

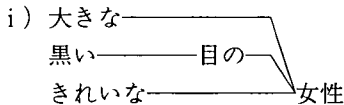
(5) T 形式文節木 (TPT) による構造表示

- a. 有名な--大学の--助教授
- b. 有名な--/{NP}
大学の--/{NP}助教授

また、次の名詞句の場合には、少なくとも a~e の5通りの解釈がありうる。文節木を用いて示すと次のようになる。それぞれの i) は G 形式文節木、ii) は T 形式文節木による表示である。

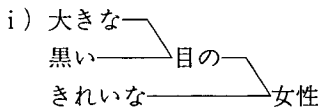
(6) 大きな黒い目のきれいな女性

- a. (この女性は大柄できれいであり、また、彼女の目は黒い色をしている)



- ii) 大きな-----/{NP}
- 黒い--目の--/{NP}
- きれいな----/{NP}女性

- b. (この女性はいきれいであり、また、彼女の目は大きくて黒い色をしている)



- ii) 大きな--/{NP1}
- 黒い----/{NP1}目の--/{NP2}
- きれいな-----/{NP2}女性

- c. (この女性は大柄であり、また、彼女は黒くてきれいな目の持ち主である)

- i) 大きな———
黒い—目の—きれいな—女性
 - ii) 大きな-----/{NP}
黒い--目の--きれいな--/{NP}女性
- d. (この女性の目は大きく、また、その目は黒い色をしていてきれいである)
- i) 大きな———
黒い———目の——きれいな——女性
 - ii) 大きな--/{NP}
黒い----/{NP}目の--きれいな--女性
- e. (この女性は大柄で色黒であるとともに、また、きれいな目をしている)
- i) 大きな———
黒い———
目の—きれいな—女性
 - ii) 大きな-----/{NP}
黒い-----/{NP}
目の--きれいな--/{NP}女性

このように、文節木を用いることで、構造的な曖昧性がある程度まで表示し分けることができる。構造的な曖昧性を表示し分けることができるということは、一つの言語表現に対して、複数の論理形式が対応していて、いくつかの候補が選択可能である場合に、そのうちのどの候補、どの論理形式を選択したかを示すことができるということである。

ここで、論理形式とは、Sperber and Wilson (1986)の関連性理論での規定に従い、言語の物理的な具現形式(発話形式)をコード解読して直接得られる心的な意味表示のことであるとす。一つの発話形式が、複数の論理形式に対応する場合、発話の理解者は、どの論理形式を選択するかを自己決定しなくてはならない。例えば、(6)の例では、5通りの論理形式が選択候補になっている。

ただし、文節木は、論理形式そのものを精密に表示することは目指していない。文節木が示すことができるのは、どの論理形式を選択したかについての手がかりであるに過ぎない。その表示は、あくまでも、限定的・部分的・近似的な段階にとどまる。

2 文節木を發展させた解釈記録形式

言語表現の解釈とは、言語が表示する意味を、文脈の中で「個別化」「具体化」「特殊化」しつつ、その成果を随時自覚していく動的な過程である。言語が表示する意味は、普遍的・抽象的・一般的なものであるが、解釈という営みにおいては、これを限りなく個別化・具体化・特殊化していくことになる。

異なった解釈が複数存在する場合に、個々の解釈の違いがどのような要因によって引き起こされているのか、また、その違いが、単に解釈の深さや幅の違いなのか、それとも、解釈タイプそのものの違いなのか、このような点を研究課題とすること、すなわち、「解釈の可能性と優先度」に関する研究は、語用論の大きな課題の一つとなっている。

このうち、「解釈の可能性」に関する研究は、一つ一つの解釈の個別差がどこにあるのかを記

述し、そこに潜在する解釈の不確定性が何に根ざしているのかを説明しなくてはならない。そのためには、解釈の差を記述し分けることのできる解釈記録の方法が必要となる。ただし、解釈そのものは複雑な心的過程であるため、それを言語等を用いて明示する解釈記録は、限定的・部分的・近似的な段階にとどまる。

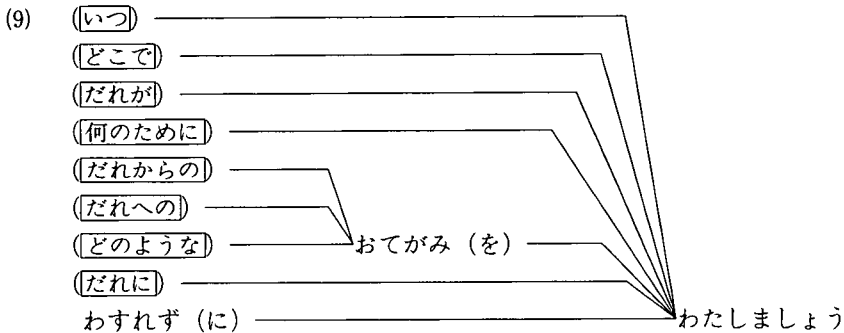
次に示すのは、幼稚園児向けの『おやくそくカレンダー 第2集』（ないおん編集室）に標語として掲げられている「おやくそく」の一つである。これをG形式文節木で表すとaのようになる。さらに、この場合、「おてがみ」は「わたす」という述語に対するヲ格成分であり、また、「わすれず」は「わすれずに」と言い換えることができる。つまり、aの文節木は、「を」「に」を補って、bのように拡張することができる。

- (7) おてがみ わすれず わたしましょう
- a. おてがみ ————
 わすれず ———— わたしましょう
- b. おてがみ (を) ————
 わすれず (に) ———— わたしましょう

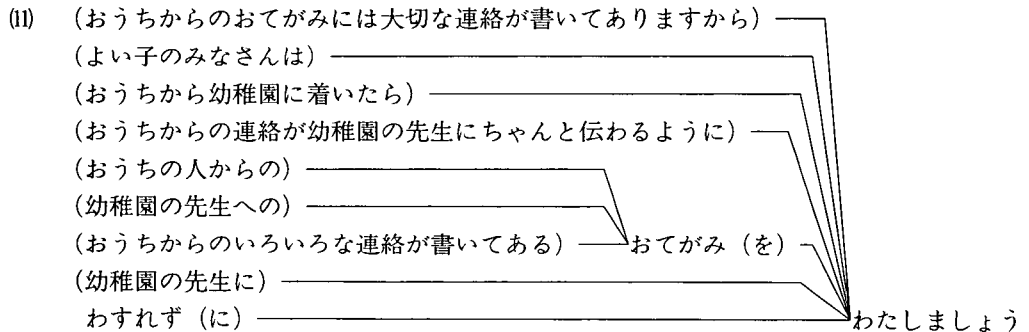
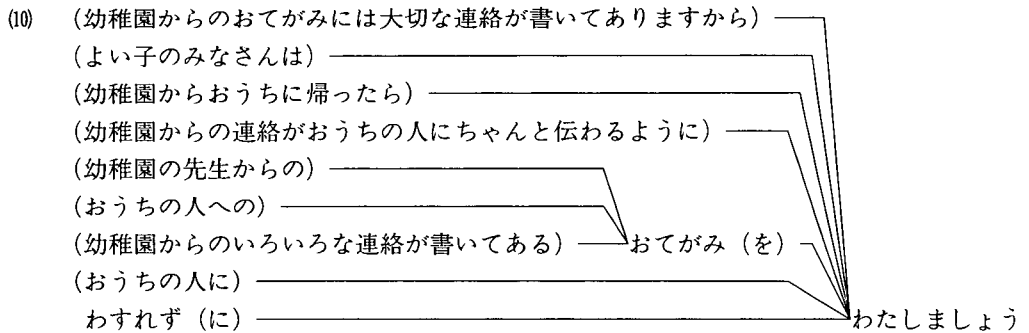
ところが、これではまだ、この標語は意味解釈上、漠然としすぎている。解釈をせばめるためには、この「おてがみ」が、だれから、だれへの、どのような「おてがみ」なのかを個別化・具体化・特殊化しなくてはならない。また、「わたす」という行為についても、まずは少なくとも、だれが、だれに「わたす」のかが明らかにされねばならず、さらに、必要に応じて、いつ、どこで、何のために「わたす」のかが個別化・具体化される必要がある。つまり、この標語には、次の図に示すように、表現としては顕現していない解釈上のいわば「空所」がいくつもある。

- (8) a. (だれからの) ————
 (だれへの) ————
 (どのような) ———— おてがみ
- b. (いつ) ————
 (どこで) ————
 (だれが) ————
 (何のために) ————
 おてがみ (を) ————
 (だれに) ————
 わすれず (に) ———— わたす

これを一つにまとめると次の(9)のようになる。これは、(7b)に示した元の文節木に対して必要なノードやリンクを接ぎ木した表示となっており、そうすることによって解釈上の空所を示そうとしたものである。解釈者はこれらの空所を、個別的・具体的な解釈に応じて埋めていかなければならない。その際、すでに利用できる文脈がある場合はそれを参照し、また、そうでない場合は新たに文脈を想定する必要がある。枠囲みのノードは、この標語の意味を個別化・具体化・特殊化するために、解釈者が当面答えなくてはならない解釈課題を示しているということになる。



ところが、このような解釈課題に対する答の出し方は、必ずしも一通りではない。例えば、「だれにわたすのか」という点について、「おうちの人に」という解釈と「幼稚園の先生に」という解釈のどちらも可能である。それに応じて、「だれから、だれへのおてがみか」という解釈も、当然連動することになる。次に示すのは、(10)の方が「おうちの人にわたす」という解釈パターンの場合、(11)の方が「幼稚園の先生にわたす」という解釈パターンの場合である。



これらは、いずれも、元の文節木を拡張し発展させることによって得られた表示形式であるとともに、既存の文脈を参照したり新たな文脈を想定したりすることによって得られた語用論的な解釈を記録したものになっている。このように、文節木を拡張・発展させることで作成する解釈記録の表示形式を、「解釈記録形式」(略称 IRF: Interpretation Recording Form)と呼ぶことにしたい。

この(10)・(11)には、上記の(8)で空所として明示した解釈課題に対する答の他にも、重要な解釈成果が盛り込まれている。その第一は、解釈記録形式(10)・(11)のそれぞれ1行目に示されている内容であり、そこには、どのような理由で「わたしでしょう」と相手(幼稚園児)に勧めてい

るのが明記されている。また、それぞれの2行めには、どちらも「よい子のみなさんは」と明記されているが、この部分は、「わたす」という行為の主体を表していると同時に、「みなさんはよい子ですから」、あるいは、「みなさんがよい子であるならば」という条件も含意している。これら二点は、いずれも、「おてがみ わすれず わたしましょう」という表現が帯びる表出態度の解釈と深く関わっている。

関連性理論における用語で言えば、文節木を拡張・発展させることで作成する解釈記録形式は、論理形式から低次表意への発展プロセスを記録できるだけでなく、命題態度や発語内効力と直接関わる高次表意の内容をも記録することができるということである(この点については、続稿の中で具体的に論じていく予定である)。

3 解釈記録形式を用いた分析事例

この節では、短い詩作品の解釈事例を採り上げて、文節木を発展させた解釈記録形式が、解釈の可能性や優先度の検討を行う上でどのような役割を果たすことができるのかについて例示する。

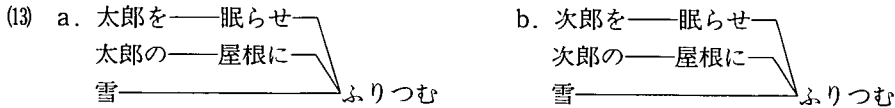
3.1 処理コストのトレードオフ

次に掲げるのは、詩集『測量船』に収められた三好達治の詩「雪」の本文である。

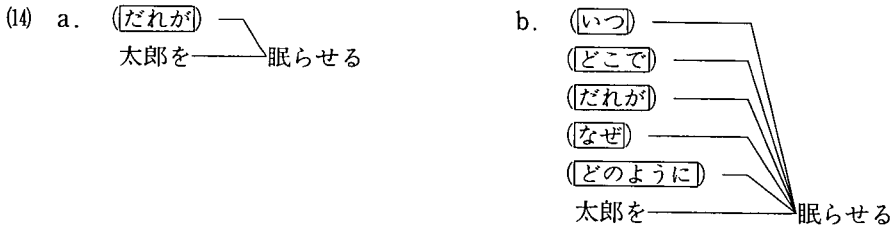
(12) 太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

この詩は2つの文から成り、第1文と第2文は、「太郎」と「次郎」が入れ替わっているだけで、きわめて明確な平行性をもって表現されている。それぞれを文節木で表示すると次のようになる。



第1文において、まず解釈上問題になるのは、他動詞「眠らせる」の主体である。すなわち、次のaに示した「だれが」の位置に何を入れるべきかが解釈課題となる。さらに、「眠らせる」には、「だれが」という要素以外に、bのような拡張要素を付加することのできる余地がある。このような解釈上の空所を意味的に埋めていくことによって、「太郎を眠らせ」という節が表す意味を個別化・具体化・特殊化して解釈することができる。



「太郎を眠らせ」たのが誰か(何か)という問題について、山本健吉は、『日本現代文学全集77』(講談社)の「作品解説」で次のように述べている。

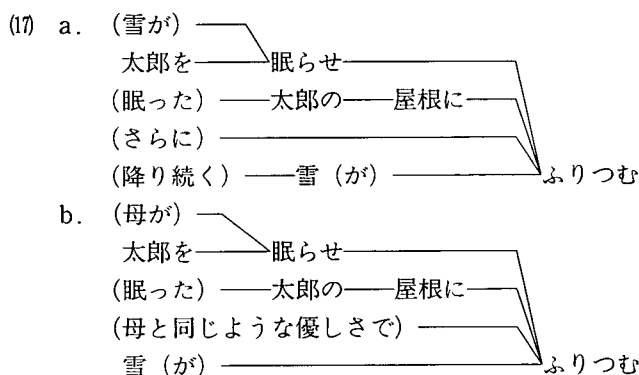
(15) 太郎を眠らせて、そこで夜なべに針仕事か何かをやっている日本の母親の姿があり、そ

の家には霏々として雪が降り積り、その景色は字から村へ、町へ、国へ及んで行く。

これによると、「(母親が) 太郎を眠らせ」たのだ、という解釈になる。一方、西郷竹彦は『名詩の美学』(黎明書房)の中で次のように述べ、複数の解釈可能性があることを示している。

(10) <太郎を眠らせ> <次郎を眠らせ> ているものは、<雪>であるともいえよう。あるいは、母か、祖母か。

「太郎を眠らせ」の主体を「雪」とする解釈パターンと、「母」とする解釈パターンを、それぞれ文節木を用いた解釈記録形式で示すと、次のようになる。



ここで重要なことは、「雪」は詩の中に表現として顕現しているが、「母」や「祖母」のことは詩の中には出てこないという点である。この点を安西均は、『現代詩鑑賞講座 10』(角川書店)所収の「三好達治論」で、次のように述べている

(18) 子どもたちが、今は無邪気な寝顔で眠っている。そのまわりには、詩が説明しない、あたたかい家族の無言の愛がたちこめている。

つまり、「太郎を眠らせ」たのが誰かという問に対して、「母」や「祖母」や「家族」を答とすることとは、「詩が説明しない」ことまで想定に加えるということである。そのような解釈を行うためには、それを可能にするための文脈拡張がおのずと必要になり、表現されていない要素を文脈として想定する以上、当然、処理労力というコストがかかる。

しかし、「太郎を眠らせ」の主体が、表現として顕現している「雪」であるという解釈も可能であるのに、なぜ、そのようなコストをかけてまで、この詩の中では直接言及されていない「母」や「祖母」や「家族」といった要素を、解釈の中に持ち込もうとするのであろうか。言い換えれば、「太郎を眠らせ」の主体が「雪」であるという解釈と、「雪」以外の何者かであるという解釈とが併存し、場合によっては対立する理由は何なのであろうか。

実は、「太郎を眠らせ」の主体が「雪」か「雪」以外かという問題は、コストのトレードオフになっていると見られる。「太郎を眠らせ」の主体が「雪」であるという解釈をとれば、「雪が太郎を眠らせる」という擬人化解釈を採用することになる。このような擬人化解釈をとる読み手は、当然のことながら「雪が太郎を眠らせる」とは具体的にはどういうことなのかということについて、一歩先に進めた推論を余儀なくされる。それだけ擬人化解釈にはコストがかかる。つまり、「太郎を眠らせ」の主体を「雪」と捉えても「雪」以外と捉えても、どちらも解釈コストがかかってしまうのである。

例えば、安西均は、前掲の「三好達治論」の中で、一方では、「太郎と次郎と二人いるからこそ、この家庭もこの子たちも寂しくない。」と述べて、「太郎」と「次郎」が兄弟であるという解釈に触れたあと、さらに続けて、「太郎と次郎は別々の家だという想像も、美しく豊かである。」と述べている。「太郎」「次郎」の相互関係の捉え方は、「太郎の屋根」と「次郎の屋根」の指示関係の解釈に直接影響する。兄弟ということになれば、その内包は別としても、外延としては同じ「屋根」を指示するということになる。

- (2) a. (太郎の弟の) ——次郎を——眠らせ
 次郎の——屋根 [=太郎の屋根] に
 雪 (が) ————— ふりつむ
- b. (太郎とは無関係な) ——次郎を——眠らせ
 次郎の——屋根に [≠太郎の屋根]
 雪 (が) ————— ふりつむ

また、「太郎」や「次郎」が、特定の間個人体を指示しているのではなく、いわば子どもの「総称」なのだという解釈も見られる。例えば、桜井勝美は『現代詩の魅力』（東宝書房）の中で、「ここで〈太郎〉〈次郎〉とっているのは、ある特定の太郎、次郎を指しているのではなく、子供たち一般とみてよいでしょう。」と述べているし、また、山本健吉も前掲書の中で、「太郎とか次郎とかいふのは、日本人が八幡太郎や熊谷次郎の昔から家の子たちにつけて来た名前であり、ほとんど普遍的な名前であり、愛称である。」と述べている。

さらに、なかには、「太郎」「次郎」が人間以外の動物を表しているという解釈を行う読み手もいる。例えば、中桐雅夫は『詩の読みかた詩の作りかた』（晶文社）で、次のようなエピソードを紹介している。

- (23) ある青年が「実は、自分はいま初めてこの詩のことを知ったのだが、あなたが読まれたのを聞いたときすぐに、太郎と次郎は南極の樺太犬のことだと思った。そういう読み方でもかまわないだろうか」といいました。聴衆からは、笑い声がおこりました。

中桐自身は、「解釈にもおのずから限度があろうと思われるのは、この樺太犬的解釈の例です。」と述べ、このような解釈を否定しているのだが、実際に私の授業を受講している学生にこの詩の解釈を尋ねてみると、「太郎・次郎は犬だ」という解釈も確かに出てくる。

このように、「太郎」「次郎」の指示関係の捉え方には、少なくとも次のような三つのタイプがある。

- (24) a. 「太郎」「次郎」は人間（若い男の子）の個体名である
 i) 「太郎」と「次郎」は兄弟である
 ii) 「太郎」と「次郎」は他人である
 b. 「太郎」「次郎」は子どもの一般名（総称）である
 c. 「太郎」「次郎」は人間ではなく、犬の個体名である

3. 4 節間ならびに文間の関係と推意解釈

第1文についても、第2文についても、「太郎」または「次郎」を「眠らせ」ることと「雪」が「ふりつむ」こととの間に、どのような因果関係や時間関係を読み込むかということが、実は、「眠らせ」るのが誰かという解釈問題と連動する。例えば、いま時間的な前後関係に注目すると、「太郎（次郎）を眠らせ」ることと「雪（が）ふりつむ」こととの間には、同時性と継起

性の2種類の関係を読み込むことができる。

(25) a. 太郎を——眠らせ
 (そうしながら) ——
 太郎の——屋根に ——
 雪 (が) —— ふりつむ

b. 太郎を——眠らせ
 (そのあとで) ——
 太郎の——屋根に ——
 雪 (が) —— ふりつむ

aの場合、「太郎(次郎)を眠らせ」の主体は「雪」であるという解釈と親和しやすいであろうし、逆に、bの場合は「雪」以外の母や祖母などの家族が想定されやすいであろう。

また、第1文と第2文との平行性もたらず推意についても、解釈上の問題とされている。篠原資明は『心にひびく短詩の世界』(講談社)の中で、次のような解釈を示している。

(26) 名前を変えただけの一行をくりかえすことにより、(…)太郎の家、次郎の家だけではなく、それ以外の数々の家への広がりをもほのめかすだろう。

また、西郷竹彦も次のような解釈を示している(前掲書)。

(27) <太郎を眠らせ> <次郎を眠らせ> というリフレインは、このあと三郎、四郎……という広がりを感じさせる。

また<雪ふりつむ>のリフレインも、いつまでもやむことなく降りつづけるであろうイメージを生みだしている。

これらは、明確な平行性をもった第1文と第2文が、どのような推意を発生させるのかについての指摘である。両者に共通しているのは、「広がり」ということばの使用だが、「太郎」と「次郎」のことだけを問題にしているのではなく、より一般的な「広がり」をこの詩に解釈しようとしていることがわかる。このような方向は、「太郎」「次郎」を個体名として解釈するのではなく、一般名(総称)として解釈しようという傾向と通じている。非過去のテンスをもつ「ふりつむ」が反復されることによって、永続的な雪の降りようが表されているとする西郷の解釈も、また普遍性を志向した解釈となっている。

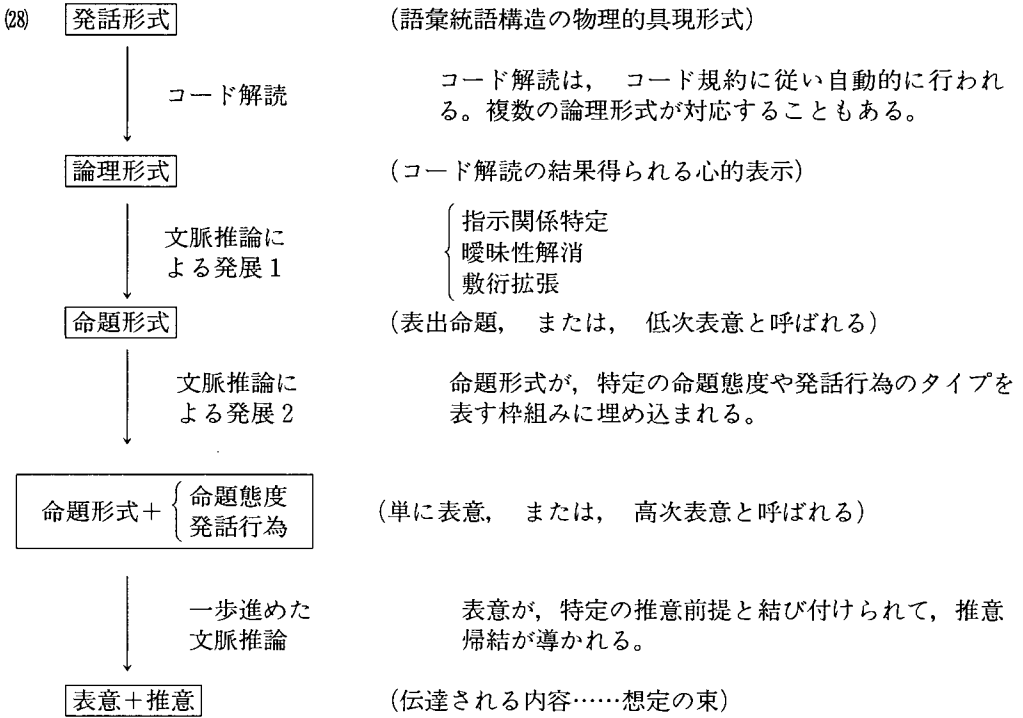
この詩の二つの文の平行性が、解釈に及ぼす影響については、中桐雅夫も触れている(前掲書)。中桐は、この詩の解釈について、「太郎は長男、次郎は次男にごくふつうにつけられる名前」であり、「長男と次男ならば、一軒の家に寝ているとみるのが当然」であると結論しながらも、その一方で、「太郎の屋根、次郎の屋根と列記されている点を重視すれば、別々の屋根のような感じがしないでも」ないとも述べている。つまり、この詩のもつ極めて明確で単純な平行性が、解釈上の曖昧性を発生させる原因の一つになっているという指摘である。こういうところにも、解釈のトレードオフ現象が見られる。

以上、この節では、三好達治の詩作品「雪」について、その解釈の可能性と優先度について見てきた。解釈問題を個々に取りあげてきたが、大切な点は、そのいずれもが相互に関連しており、部分の解釈が全体の解釈に影響を及ぼし、また、全体の解釈が部分の解釈を左右するという点である。したがって、解釈の優先度を評価する際には、どの解釈が全体と各部分とで整合性や一貫性を保っているかという点が重要になってくる。

文節木を拡張・発展させた解釈記録形式を用いることのメリットは、必要に応じて、問題部分の解釈を表示できるという点にある。そのことによって、解釈タイプの差が明確に示され、ある個所の解釈と別の個所の解釈との整合性や一貫性もチェックしやすくなる。

4 解釈の可能性と優先度の記述に向けて

関連性理論では、発話の一般的な理解過程を次のように捉えている。



この図は、主として Sperber and Wilson(1986)と Blakemore(1992)によってまとめたものである。この理解過程についての説明は、高本 (1994・1996)を参照されたい。特に、関連性理論の発話理解過程の捉え方のうち、最も重要な「表意」と「推意」の区別については、Carston (1988)と Récanati(1989)の議論が参考になる。

文節木を拡張・発展させた解釈記録形式では、この理解過程の各段階での解釈成果を記録の中に取り込むことが可能である。このことは、Grundy (1995)が指摘するように、単に解釈タイプの違いを表示し分けることだけでなく、解釈の「深さ」のレベルを表示できるということを示している。元の文節木に対して、どれだけ新しいノードやリンクを付け加えるか、あるいは、どれだけ補助的な解説をリンクさせるかは、解釈を記録しようとする者に委ねられている。

ある言語表現について、解釈の可能性と優先度について自覚を深めるためには、まず、他の人の解釈と自分自身の解釈との差を自覚し、それを明確に指摘できる必要がある。さらに、そのためには、その言語表現に対する自分自身の解釈を自覚し、それを他の人に向けて提示する習慣をもたなくてはならない。したがって、解釈の可能性と優先度の問題について考察していくためには、次の三つの方法を模索していかざるをえないと考えている。

- (29) a. ある言語表現に対する己れの解釈を明示する解釈記録を積極的に作成することによって、己れの解釈を他の人に提示するための方法。

- b. 他の人が作成した解釈記録を吟味することで、その人の解釈と己れの解釈との違いがどのような要因によって生じたかを説明するための方法。
- c. 他の人と共有できる一般的な用語・概念を用いて、ある言語表現に対する解釈の可能性と優先度に関して妥当な記述を行うための方法。

文節木を用いた構造表示と、それを拡張・発展させた解釈記録形式は、これら三つの方法に接近していくための出発点に過ぎない。記法の整備洗練やマニュアルの作成、T形式とG形式相互の相互変換など、今後に残された課題が多い。今後も、継続的に応用と改良を進めたい。

参 考 文 献

- 高本條治 1994 「何が旅ごころを誘うのか—JR 広告コピーの語用論的分析」, 学苑 650.
- 高本條治 1995 「カワセミは飛んでいるのか?—川端茅舎句『翡翠の影こんこんと潮り』の語用論的分析」, 上越教育大学研究紀要 14-2.
- 高本條治 1996 「蟬がなきだすとお礼が口をつく事情—柳句『せみがなき出すとお世話に成ました』の語用論的分析」, 岡山大学国語研究 10.
- 高本條治 1997 「くもの悲しみ・わたしの悲しみ—八木重吉『雲』の語用論的分析」, 上越教育大学研究紀要 17-1.
- 高本條治 1998a 「金子みすゞ『積つた雪』の語用論的分析—非平行的解釈を動機づける構造的条件」, 上越教育大学研究紀要 18-1.
- 高本條治 1998b 「言語表現の語用論的解釈とその記録形式」, 日本教育大学協会北陸地区会国語科・書道科合同研究協議会(研究発表資料). [1998年10月29日 上越教育大学]
- 高本條治 1998c 「解釈記録のフォーマットとプロトコル」, JACET(大学英語教育学会)談話行動研究会(研究発表資料). [1998年11月26日 東京外国語大学]
- 高本條治 1999 「文節関係解析木(文節木)について—解釈記録のための骨組み」, 上越教育大学研究紀要 18-2.
- 長田久男 1984 『国語連文論』, 和泉書院.
- 長田久男 1997 『日本語構文論』, 岐阜タイプライター.
- 西山佑司 1992 「発話解釈と認知—関連性理論について」, 安西祐一郎〔ほか編〕『認知科学ハンドブック』, 共立出版.
- 西山佑司 1999 「語用論の基礎概念」, 田窪行則〔ほか〕『談話と文脈』(岩波講座 言語の科学, 第7巻), 岩波書店.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An introduction to pragmatics*. Blackwell. [武内道子〔ほか訳〕『ひとは発話をどう理解するか』, ひつじ書房, 1994年]
- Carston, R. 1988. 'Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics'. In Kempson (1988). [Davis (1991) に採録]
- Carston, R. and S. Uchida (eds.) 1997. *Relevance Theory: Applications and implications*. John Benjamins.
- Davis, S. (ed.) 1991. *Pragmatics: A reader*. Oxford University Press.
- Grundy, P. 1995. *Doing Pragmatics*. Edward Arnold.
- Kempson, R. M. (ed.) 1988. *Mental Representation: The interface between language and reality*. Cambridge University Press.

- Récánati, F. 1989. 'The pragmatics of what is said'. *Mind and Language* 4. [Davis (1991) に採録]
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and cognition*. Blackwell.
[Second Edition: 1995. 内田聖二(ほか訳)『関連性理論—伝達と認知』, 研究社出版, 1993年(第2版:1999年)]
- Sperber, D. and D. Wilson. 1987. 'Précis of *Relevance: Communication and cognition*'. *Behavioral and Brain Science* 10.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1986. 'Inference and implicature'. In C. Travis (ed.), *Meaning and Interpretation*., Basil Blackwell. [Davis (1991) に採録]
- Wilson, D. and D. Sperber. 1988. 'Representation and relevance'. In Kempson (1988).
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. 'Linguistic form and relevance.' *Lingua* 90: 1/2.
- Wilson, D. 1994. 'Relevance and understanding'. In G. Brown, K. Malmkjær, A. Pollit and J. Williams (eds.), *Language and Understanding*., Oxford University Press.

Structural Representation and Interpretation Recording Using P-tree

Joji TAKAMOTO*

ABSTRACT

P-tree stands for 'Phrase Tree' (*Bunsetsugi*) which is a diagram notation to represent Japanese sentence structure visually. Each p-tree includes several phrase-nodes (*bunsetsu-nodes*) and relational links among them. These links can indicate both immediate and reserved connectedness between two coupled phrase-nodes.

P-trees can be drawn in both graphical format (G-format) and plain-text format (T-format). G-formatted p-trees (abbreviated as GPT) can be easily writable and readable even for beginning students. On the contrary, T-formatted p-trees (as TPT) enable easy-storage and easy-exchange of text corpora which have 'interpretation recordings' built-in for many computer-aided researchers of Japanese linguistics, literature, and language education.

P-trees can develop to the expanded and developed diagrams which I call 'Interpretation Recording Forms' (IRF) by adding new nodes and links according to one's semantic and pragmatic interpretation. An IRF concisely displays one's pragmatic interpretation, including logical form selection, explicature development and implicature inference.

* Division of Language, Department of Japanese Language.